座談会
「平成の合併を振り返る」

日時:令和3年10月25日　場所:山口公民館ホール

加藤　出
（山口村長）

吉村　敏彦
（坂下町助役）

田代　鋭
（川上村長）

田口　好文
（加子母村助役）

今川　春季
（付知町議会議長）

深谷　勲
（福岡町議会議員）

中西　康浩
（蛭川村助役）

三浦　博行
（中津川市市長公室長）

（当時の役職名）
※順不同・敬称略

※後列は合併記録編纂委員

座談会
「平成の合併を振り返る」

- とき　令和3年10月25日
- 会場　山口公民館ホール

司会:平成17年2月13日に中津川市と恵那郡北部6町村及び長野県山口村が合併した平成の市町村合併から16年余が経過し、その経緯を知る人も次第に少なくなってきました。そこで、当時さまざまな立場で合併協議に携わられた皆さんに「平成の合併を振り返る」として各市町村がどのように取り組み、幾多の困難を乗り越えてこられたかをお話いただくことになりました。私は本日の司会をつとめます中津川市定住推進部定住推進課長の楯京子です。よろしくお願いいたします。

　では今回の合併の枠組みが決まるまでにはそれぞれの町や村でさまざまな議論があったと思われますが、いかがでしょうか。

吉村(坂下):恵那市との合併というのは坂下町では考えていなかった。一番繋がりの深いのは中津川市ということで、それに落ち着くと考えていました。

今川(付知):付知町では、当初は合併に対して賛成という意見があまりなく、非常に低調なスタートでした。協議をやっているうちに中津川市との合併ではなく、恵北だけでもいいのではないかという話も出るなど紆余曲折を経て、中津川市との合併という方向へ動きました。最終的にはこの合併が一番いいということになりました。

司会:やはり合併をするとなるとさまざまなご意見があったということですね。

　合併の枠組みには「中津川市と恵那市・恵那郡」という案もありました。蛭川村は恵那市との関係があったと伺っておりますがいかがでしたか。

中西(蛭川):恵那市との合併については、蛭川村は昭和の合併の時に恵那市と合併の調印までしたけれども、村民には「合併するな。」という声が強かったこともあり、調印をした次の朝に、村長と議長は県庁へ出向き、自分たちが合併しますと調印したものを取り下げてきた経緯があったので、我々は恵那市に対してものすごく不義理をしたという思いがありました。

　恵那市からは、「蛭川村は恵那市にぜひ入ってくれ」と声がかかった一方で、恵那市民からは、かなり厳しい言葉もいただきました。恵那市へここでまた不義理をするわけにはいかない、どうしたらいいかということをいろいろ考え、恵北5町村と山口村と一緒の道を歩んでいくことを議会と執行部は決めました。ただし村民には生活圏や行政圏は恵那市であるから恵那市と合併するべきだという声がかなりありました。それをなんとか説得しながらやったわけですが、最後まで三つの団体がかなり厳しい声を出してきたので、ずいぶん悩みました。

　しかし、蛭川村全体のことを考えると、恵北5町村と山口村と一緒の道を歩んでいくことだと、村長も決断されて地域の方へ理解していただけるように話をし、中津川市との合併の立場で動いたというのが蛭川村の生き方でした。

司会:それぞれの町や村では住民説明会のほかアンケートを取るなど、合併の是非も含めてさまざまな意見や思いが交錯していましたが、最終的にはこうして中津川市と恵那郡北部の6町村が一体となって合併することになりました。また合併の枠組みでは、山口村は越県合併という選択をされていますね。

加藤(山口):はい。全国唯一の越県合併をするにあたり、岐阜県をはじめ中津川市と恵北各町村の皆さんにはたいへんなご理解とご協力をいただき、厚く感謝いたします。

　ご存知のように山口村は岐阜・長野の県境に存在する人口2千人程の小規模な村であり、島崎藤村の生誕地である馬籠宿には年間50

加藤 出 氏

万人程の観光客が訪れておりましたが、いよいよ国家財政はじめ県市町村財政が極めて厳しい中で、合併特例法により市町村合併の推進が本格化してきました。木曽郡11町村では木曽郡が一つになる木曽市構想が浮上してきましたが、山口村の場合は県境を隔てた中津川市や恵北町村との深い繋がりが古くからあり、更に昭和33年には隣の神坂村の一部が中津川市に大紛争の末、越県合併した過去の経緯があるため、熟慮の結果、木曽市構想から脱退をしました。

山口村民の日常生活圏は中津川市にあります。昭和33年に馬籠地域が山口村に編入合併しましたが、分村による感情的なしこりは長年にわたり続く中で、それらを解決して行くのにはこの際、中津川市への越県合併がふさわしいと考えました。そのために率直な村民の意向調査をしましたが、結果は80％が中津川市との合併を望んでいることがわかりました。村議会でも合併検討委員会を立ち上げ、中津川市との合併を推進する方向で検討することになりました。

県を越えた合併という大きなことであるため、隣の南木曽町長の意向を伺いながら、中津川市との合併を推進した経緯もあります。越県合併を問う私の村長選挙と住民投票でもある投票による村民意向調査では、いずれも越県合併を村民は選択してくれました。県を越える合併は難題であり、紆余曲折がありましたが、長野県・岐阜県をはじめ木曽郡民や中津川市・恵北町村の皆さんのおかげで越県合併が実現できました。

司会：越県合併にはさまざまな経緯があったということですけれども、中津川市としてはどのような見方をされていたのでしょうか。

三浦（中津川）：今回の平成の大合併の中で、越県合併がなし遂げられたのは全国で山口村だけです。越県合併ということを決断するということは、自治体にとっては本当に大きな判断、思い切りが必要であっただろうと想像できます。そんな中で山口村が合併に関して住民に対して行ってきた対応は、住民説明会とは別に、平成13年11月に住民アンケート調査を実施、平成15年4月には村長選挙があり、合併推進派の現職の加藤さんが当選。平成16年2月には村民意向調査も実施されましたが、合併賛成が多数でした。山口村は住民の皆さんに丁寧に説明をされて、住民の思いをしっかり汲み取られて段階を踏まれてこられたと感じています。それとともに、昭和33年の越県分村合併が大きな意味を持ち、大きく作用したと思います。それ以外にも歴史的な面、地理的な面から見ても、またゴミやし尿処理にも岐阜県側で広域行政として一緒にやっており、どこから考えてもやはり越県合併というのはごく自然な流れであったと中津川市は考えていました。

司会：合併の枠組みは決まりましたが、この合併は中津川市への編入合併とされました。その辺りについてはどのような経緯があったのかをお伺いします。

田代（川上）：合併協議の中で、当時の市長から、「恵北町村と対等合併を行うには、山口村との越県合併と、恵北との合併を分けて別々に行わなければならない。けれども合併協議をしていく中で決めていく事項等を思うと全8市町村のことを協議していくことが望ましい。また合併特例法の期限もあり、同時に合併をしたい。形は編入ということになるけれども、町村に対しては対等合併という気持ちで対応するので承知してほしい。」このような説明があり、合併に向けて協議が進められて

きたということです。

したがって、私は対等の合併だと理解しておりますし、各町村にもそのように理解されていると思っています。

司会:形は編入合併だけれども、あくまでも気持ちは対等合併だと。そう話し合い、理解をしてやってこられたということですね。加子母村ではいかがでしたでしょうか。

田口 好文 氏

田口(加子母):皆さんご承知のように加子母村は恵那郡の北端にあり、下呂町とは隣町のご縁で長い間お付き合いがあり、協力して地域づくりを進めていましたので、合併の際には一緒にならないかとのお話があり、加子母村の中には同じ思いの方々もおられました。また、南隣の東白川村・白川町とは3町村で白川流域連合協議会を作り、地域おこしに取り組んでいましたので、合併の枠組みの一つとして議論されました。このほか長野県王滝村とも交流がありました。

このように加子母村は、恵那郡北部や中津川市以外にも広く近隣の町村と協力して地域の振興発展に尽くしてきた歴史があり、合併の枠組みについてはさまざまな議論を経て、中津川市との合併が最善との結論に至りました。

編入合併については、今、田代さんからもお話がありましたけれども、私は対等合併すべきとの考えでしたし、村内の座談会の席でも対等合併すべきとの意見が多数でした。そのため、編入合併になることを説明するときには本当に苦労しました。

合併の賛否を決める加子母村議会も真っ二つに割れており、いろいろとお互い苦労の末5対4の採決で、決着した次第です。

説明会では加子母村は合併しないで独自で進むべき、独自でやれると、合併反対の意見も多くありました。当時の加子母村の財政は、財政力指数(0.194)と低く、中津川市(0.622)の3分の1足らずと自主財源に乏しく、歳入予算の約8割を地方交付税や国や県の補助金に頼る状況でした。

平成の合併は財政力の弱い小さな自治体にとっては抗うことのできないほど強力に推し進められた国の政策であり、その方法についてはいろいろと思うところはありますが、現実を見た時、結果としてはこれで良かったと感じています。

念願の越県合併を実現された、山口の加藤村長にも敬意を表します。恵北の6町村も一緒に合併できてよかったと思います。ただ、当時の加子母村の人たちは編入合併でなく、対等合併を切に願っていました。

深谷(福岡):合併の話が始まった時から、福岡町では地域というか住民から反対だという意見は割となかったです。福岡町は経済圏と生活圏が中津川市と一体化したようなところがあるので、中津川市へ合併をするということに対しての抵抗はあまりなかったと感じていました。合併を恵北だけでしてはどうかとか、当時の町長が途中で少し考え方を変えられたこともありましたが、住民の意識の中には編入であるとか対等であるということはあまり理解されていなくて、方式だけのことだろうという受け止め方をされていたと思っています。

田代さんが言われたように、当時の中津川市長さんが、名称は編入であるけれども形は対等合併で進めるということを言明をされたことが議会にも伝わっていましたので、中津川市への合併に対して住民としては何の異存もないというのが大部分の考えでした。福岡町においては、合併するかしないかの方

が重要だったかなという思いがありますね。

司会:合併の枠組みが決まり、平成14年6月に任意合併協議会「中津川市・山口村合併問題協議会」、翌7月に同じく任意合併協議会「中津川市・恵那郡北部町村合併問題協議会」がそれぞれに設置され、いよいよ合併協議が本格的にスタートしました。

その後、平成17年2月13日に合併するまでには、一言では語りつくせない物語がいっぱいあったと伺っております。その中で最も苦労したことを皆さんからお伺いしたいと思います。

中西:蛭川村は大変難儀なことばかりでした。というのは、この合併に対して住民の大半は、生活圏や広域行政圏は恵那市ということで、恵那市と合併することが妥当だという声が7割以上ありました。それを何とか恵北5町村と山口村と一緒になって中津川市と合併したいということで、村長は夜も眠れない苦痛の日々だったと推察します。住民を説得するのにかなりの時間を要しましたが、村長の信念の強さで住民投票はしませんでした。これが一番難儀をしたことでした。

ただし、恵那市か中津川市のどちらに合併するにしても、編入合併であろうが対等合併であろうが、蛭川村は財政的にほとんど将来性のない村になりかけているから、これでは今後とてもやっていけないようになる。編入でも何でもいいのでとにかく合併させていただいて、蛭川村という地域をもう一度作り直しをしようという思いが一番強かったように思います。

深谷:当時の福岡町は4つの財産区から成り立っていました。下野、高山、福岡、田瀬の4つの村が、明治の合併で福岡村を作り、福岡町となりましたが、財産区は山を持っており、それが行政運営の基礎となっていました。福岡町としての意識よりも旧の村であった財産区の意識の方が強く、今もその傾向はあると思います。

合併協議が大詰めに入ったところで、当時の町長が中津川市との合併協議会から離脱し、付知町と2町での合併を目指すという表明をされてから、住民というよりも議会や行政が混乱をしました。最終的には「住民投票をやる」こととなり、町長もその結果に従うということになりました。条例などの関係から住民投票ではなく「住民意向調査」として実施した結果、約7割近い方が中津川市との合併に賛成をされました。

私たち議会は住民の人たちの合併に対する意識を高揚していくことよりも、当時の最後の執行部との調整に、非常に労力を割いた気がしましたし、最終的には住民の皆さんには、結果として良かったなと評価をしていただけたと思います。

深谷 勲 氏

今川:今お話しいただいたことで付知町も大変迷った時期がありました。

福岡町は合併の経験がありますが付知町は合併の経験が無く、どうしても合併しなければならないのかという話までありました。けれども、やはり合併を避けては通れないということになり、じゃあ近い福岡町と合併させてもらえば一番いいのではないかということで、先ほど深谷さんが話された、福岡町の住民意向調査の結果を待ったわけです。結果は7割以上の方が中津川市との合併に賛成と判明し、これで付知町の行く先ははっきりと決まりました。

そこで「形は編入合併だけど対等合併のつもりの編入合併」という話をいただいていましたので、それに意を強くして合併に進み

ました。合併当初は住民からいろんな話がありました。そういう時にいい話は出てこなくて、「付知町の時の方が良かった」とかそういう話ばっかり。しかし今になってみますと合併して良かったなということになってきております。やはり合併に際しての一番大きな出来事は福岡町との合併を考えたことでした。

田口:最初から終わりまで苦労の連続でした。「なぜ今、合併をしなければいけないのか」村民にとって極めて素朴な疑問でした。加子母村は合併以前に、当面のインフラ整備に目途をつけ、数々の地域振興事業を進めていましたので、村の自治行政への特段の不満の声は少なく、先が見えない不安と疑問の中で合併をしたくない考えの方が多数ありました。そのため合併の理由を理解していただくために、各集落を回って説明会を開きました。説明会では、少子高齢化が急速に進む加子母村は近い将来過疎地域になること、国も地方も多額の負債を抱え財源も乏しく大変厳しい状況にあること、今こそ無駄を省き合理化を進め、行財政改革をして住みよい社会を構築しなければならないことを村の財政状況や今日までの村政運営等々、現状を説明して合併への理解を求めました。

長期にわたる木材価格の低迷により、村の主要産業であった製材所の多くが廃業を余儀なくされましたが、加子母村は山林を育み、活用して生きてきた村です。以前の小学校や現中学校、現総合事務所、公民館であるささゆり会館等々、それらの建設は主に村有林から得た収入を財源に充ててきました。

現存する旧村有林は、ほとんど成木で間伐等の手入れを的確に行えば、継続して活用できる状況にあります。村民の村有林に対する思いには特別なものがあり、山を持って合併することを理解していただくことは、とてもつらいことでした。

粥川村長は、後日発行された老人クラブの記念誌に、合併は加子母村にとって最善の道だったのか、他に道はなかったのか、結論に至るまでの苦悩を記しておられました。そんなこともあって、中には住民投票をやってほしいという声もずいぶんありましたけども、住民投票は行いませんでした。ただ先ほど言ったように、国も苦しいが地方も苦しいという時代でしたし、特に少子高齢化で子どもが少なくなっていくことだけは確実に予想されましたから。結果論としては合併して良かったということです。合併しなければよかったなんていう村民は一人もいないと思います。新しい中津川市の発展を祈るのみです。

田代 鋭 氏

田代:一言で言うと、非常に苦労したというようなことはありませんでした。

川上村は県合併推進により明治22年に坂下村と上野村との3村で明治の大合併をしましたが、宗教の違いや川上村は裏木曽三村の一つで、良質の木材があり、財政面でも独立は十分保つことができるということで、その後明治38年に分村をして、今まであった川上村になっていました。しかし、だんだんとヒノキ材を使うことが減ってきており、財産収入の減少とその他の自主財源が少ないというようなことで、地方交付税が頼りになっていることや、国が合併促進をするということは、国が財政面で苦しくなっているためで、地方交付税の対応が厳しくなってきていることを住民に説明してきました。このようなことで合併に対して反対派が出てきたり、住民投票をしなければならないということはありませんでした。

村としては村の隅々一軒残らず水道あるいは下水道が整備されていることや、他の施設においても特に問題がないと理解されていた

と思います。ただ合併後に、今までのように整備や維持管理に目を向けてもらえるか心配な面はありましたが、総体としては合併に対して理解してもらえたと思っています。

吉村 敏彦 氏

吉村:この合併問題が起きた時に、まずは町民の皆さんに状況を説明しようということで町内11か所に分けて説明会を開催しましたが、その席で「反対だ」という強い意見はありませんでした。

町内全域への説明後、町民の意見を集約するためにアンケート調査を実施しました。それで過半数の賛同が得られましたので、坂下町としては中津川市との合併に向けて具体的に協議を進めていく検討が始まりました。

坂下町は、昔から中津川市の隣ということで繋がりが多かったので、中津川市との合併についての異論はなく、非常にスムーズに協議が進んでいったと私は感じています。

加藤:話をすれば長くなってしまいますが、一言で言うなら、当時の長野県知事に振り回されたのが想定外の一番の苦労でした。

長野県知事と私が初めて合併問題について会話をしたのは、平成13年9月19日妻籠宿の本陣で開催された、長野県知事との懇談会です。その席で、長野県では市町村の合併パターンが示されていないがどうお考えかを伺いました。その時の知事の答えは、「それぞれの市町村の判断に任せる」と言うものでした。私は、山口村が想定する合併は県を越える岐阜県中津川市になるが、長野県として本当に良いのかと伺いました。返ってきた言葉は、「村民の皆さんが決めることで、決まったことを私は尊重し、支援していく」ということでした。長野県は昭和33年の旧神坂村が越県合併した時には、長野県は幹部職員を派遣して全力で引き止めしたが、今回は長野県として山口村が県を越えての中津川市との合併については全く異論もなく、引き止めも無いものだとその時に判断しました。山口村では合併問題について村民に丁寧に説明し、長野県からも職員の派遣をお願いし、財政シミュレーションをはじめ数多くの課題解決に取り組みました。中津川市との合併に対しては住民意向調査をはじめ、合併が争点の村長選挙と最後の決定となる村民意向調査は18歳以上を対象に行いました。結果はいずれも中津川市との越県合併を選択したものでした。

長野県知事による想定外の数々の発言が波紋を呼び、山口村の中にも合併反対のグループが馬籠地区を中心に3つほど立ち上がり、長野県内でも幾つかの反対グループができました。反対の理由は主に「島崎藤村を岐阜県に渡してはダメだ。」「信州の藤村だ。」というものでした。これは昭和33年の越県合併紛争時と同じ考えです。私の自宅にも県内外問わず反対グループから抗議のため、夜電話がありました。「何故、長野県から出て行くんだ」とか、「長野県民の恩を忘れたのか」などお叱りばかりです。

合併特例法により長野県・岐阜県から合併重点支援地域に指定されたにも関わらず、長野県知事の豹変により混乱を招きました。それは山口村議会・中津川市議会が合併関連議案を議決し、岐阜県議会も合併関連議案を議決したにも関わらず、9月の長野県議会に長野県知事は合併関連議案を上程しないと言われたことでした。長野県知事に抗議し議案の提案をお願いしましたが長野県知事は「私の優柔不断で申し訳ない」とか「どんなそしりを受けても申し訳ない」を繰り返すばかりで進展がないため、長野県議会の11会派を訪ね、長野県知事の説得をお願いしたり、長野県下の各市町村議会にも文書でお

願いしたりしました。しかし結果として、長野県知事は9月の長野県議会に合併関連議案を提案しませんでした。

山口村としては、12月の長野県議会への提案を待つしかなく、焦りが続きました。私のポケットには何時も「村長辞職願」が入っていました。長野県知事の言動が当初からブレることが無ければこんなことにはならなかったし、意外とスムーズに越県合併は進めることができたと思います。

三浦:このことは、私が市長の思いを代弁することができませんので、一担当者として感じたことをお話しします。

一番苦労したというのは住民説明会です。旧中津川市内の各地区で市民の皆さんに説明をするときに必ず出る質問は、中津川市にとってこの合併はどんなメリットがあってどんなデメリットがあるんだということでした。それからもう一つは、合併協議をしている町村からは、借金を持ってくるのではないかという質問がよく出ました。

三浦 博行 氏

それらの質問について私どもとしては、理解していただけるように丁寧な説明を心がけてきましたが、その時に市長が市民の皆さんに力を込めて説明していたことは、「表面に現れるメリット、デメリットというだけの話ではなく、中津川市は東濃東部の中核都市として近隣市町村の抱えているさまざまな課題を引き継ぐ役割と使命を持ち、周辺の発展なくして中津川市の発展はないという将来を見据えた広い視野に立って合併協議に取り組んでいくことが大切である」ということでした。市民の皆さんからそういう質問が出る都度、丁寧に説明をされていたことを思い出します。

また、中津川市が今協議している合併協議をなくして合併しなかった場合はどうなるのだという質問に対しても、市長は「近隣の町村が寂れていけば、中津川市だけが元気でいるということはできない。中津川市はそういう「まち」であるから、いろいろと難しい問題はあるが、近隣と一体となって考えていかなくてはならない」というような説明もいつもされておられたことを思い出します。住民説明会に回らせていただいている私としては、これらの答えに納得していただけるかどうかということが一番苦労したことでした。

もう一つ苦労したことといえば、長野県知事と長野県議会とのやり取りです。特に平成16年12月の長野県議会において、9月議会に引き続いて、知事が山口村の越県合併関連議案を提案しなかったため、議員提案となりましたが、そこに至るまでにすごく苦労しました。山口村の皆さんもかなり苦労されたと思いますが、中津川市も同行して一緒に対応させていただいていましたので、その時のことは鮮明に覚えています。この二つが本当に大きな苦労であったと実感しています。

司会:いろいろご苦労されたことのお話を伺いましたが、合併にまつわるよもやま話もあると思います。

先ほど長野県の12月議会で苦労されたという話もありましたが、その長野県庁での出来事をもう少しお伺いしたいと思います。

加藤:合併の日は平成17年2月13日と決定していましたので、12月長野県議会に合併関連議案を出していただかないと間に合わないし、国の機関と岐阜県や中津川市・恵北町村に多大な混乱と迷惑を掛けるということで大変焦りました。何度も長野県知事をはじめ関係部局を訪ね、12月長野県議会に議案を提出して欲しいと懇願しました。合併賛成の山口村民も議案を提出するよう

1,200名分の署名を長野県知事に提出してくれました。長野県議会共産党県議団も長野県知事に対し、議案を提出するよう申し入れをしてくれました。長野県知事は頑なに12月長野県議会初日には提案しませんでした。

12月長野県議会の会期が迫る中、12月20日長野県議会に対し、総務省が示してくれた議員提案を中津川市長や恵北町村長と市町村議長らが要請してくれました。また長野県庁前広場には、山口村の合併賛成派や反対派の人たち200名ほどが集まっていました。長野県知事が長野県議会総務警察委員会に対し、合併関連議案を提出しない考えを伝えたため、12月20日から同総務警察委員会が議員提案に向けて動き出してくれました。同総務警察委員会に出席した中津川市長と私は、議員提案の要請を強く訴え、長野県議会は会期を12月24日まで延長し、議員提案することに踏み切ってくれました。同月22日の深夜0時30分に長野県議会が再開されました。同日午前3時頃には宮沢敏文長野県議会議員が「山口村一村での自立は困難で、合併の相手先は地域の結び付きから中津川市が適切だ」と提案理由を説明してくれました。その後、同総務警察委員会が開会され、私も山口村最後の村長になるかもしれない心情を訴え、新しい地域づくりに向けての決意を述べさせていただきました。

午後4時頃再開された長野県議会本会議において、合併関連議案を県議会議員49人が賛成、7人が反対で可決されました。同日午後6時頃でした。その瞬間に肩の重荷が取れ、涙が溢れ中津川市長と固い握手を交わしたことを今でも鮮明に覚えています。岐阜県をはじめ中津川市や恵北町村の皆さん方には多大な迷惑をおかけしてしまいましたが、山口村として感謝の気持ちで一杯でした。

総務省への合併申請書も、年明けの1月4日に持参提出ではなく、長野県知事らしく郵送であったと聞いて、またびっくりしました。紆余曲折はあったものの、全国唯一の越県合併が成就できて良かったです。

司会:本当に長くかかってようやく議決されて、それからまた総務省へ書類を提出という長いドラマがあったわけですね。

ところで、山口村での出来事は、同じ合併をする坂下町でも隣ということでずいぶん関心を持ってご覧になっていたと思うのですが。

座談会の様子

吉村:加藤さんから長野県とのいろんなことについてお話をいただいたところですが、実は中津川市と恵北の町村長が長野県へ要望に伺った時、坂下町長は他に用事がございまして出席出来なかったので、私が代理でお供をしました。その長野県議会総務警察委員会に要望した折に、突然、隣接する町村の代表ということで、坂下町から今度の合併についての情勢とかについて説明してくれという話が急にございまして、私が話をしました。

両町村は木曽川を挟んで両側に位置している、昔から嫁さんに行ったり来たりする間柄であることなど、さまざまな面で関係が深いことをその席でお話した記憶があります。そんなことで緊迫した中での要望ということでしたが、私も良い経験をさせていただいたなと思います。今でも合併の話題が出てくるといつも思い出します。

司会:今改めて、越県合併がいかに大変だったか、そして平成の合併で越県合併したのは全国唯一、山口村だけだったというのも本当に分かる気がします。

他にも合併が一筋縄ではいかなかったことを物語る、「福岡町長が唐突に発言した合併

の枠組み変更」というのがございました。当事者の福岡町もさることながら、一緒にならないかということでお話があった付知町に伺います。

今川:あれはどちらかと言うと、付知町の方から申し出をしたのではなかったのではないかな。

深谷:両方だったのではないかな。

今川 春季 氏

今川:町民の皆さんの意見をある程度お聞きしたところ、大きな合併より小さい合併の方がいいという意見が結構多かったので、それも一度考えてみようということで、福岡町長と、うちの町長と私と話をしたことがあります。だんだん話をするうちに現実味を帯びてきて、福岡町は住民投票をするとなりました。その結果が良ければ付知町はついていくし、結果が悪ければ中津川市との合併を進めるというそんな話になっていったと思います。結果は先ほど深谷さんが言われたように圧倒的に中津川市との合併が多いというものでした。

付知町は合併の経験がないということで、合併に対する不安感というものが町民の皆さんにすごくあったので、私は町名を決める時に中津川市付知町をかたくなに主張しました。中津川市付知でもいいのですが、合併をしたことのない町というのはそんな小さなことにも不安を感じますので、中津川市付知町として「町」を残してほしいと頼み、残していただきました。

ここに当時の合併説明会での町民の質問等を書いたものがありますが、ほとんどが不安です。それが皆さんの努力で解消されて、今は本当にうまくいっているなと思います。私どもが一番に苦労したのは、住民の不安を取り除くということだったように思います。

司会:それぞれの町、村、そして受け入れる市も大変な思いをしてようやく一緒になったなということがよく分かります。

いよいよ合併の日が近づきました。それぞれの役場で閉町式や閉村式が執り行われ、それぞれに歩んでこられた町や村の歴史が閉じられるということは、言葉では簡単に言い表せないことだとは思いますが、村がなくなるということで、田代様は最後の村長さんでおられましたのでいろんな思いがあったのではないでしょうか。

田代:いい方のことを言いますと、川上村の場合人口が非常に少ないので、合併することによって大きな一つの行政区になることにより、多くの方といろいろな場で出会うことが多くなることと、今まで以上に緊密な付き合いができるようになります。このことは、趣味等の個人的な面でのプラスとそれぞれの地域の人々との交流が一層広くそして深くなり大きなプラスになると思います。逆に大きくなることにより、川上村のような、地形からすると隅にある小さな地域では、なかなか目を向けてもらうことが難しい…。そうなりがちだと思います。そういう面ではとても心配があります。

インフラについては川上村もかなり整備をしてきましたが、今後それらに修繕等が必要になったときに、広くなれば目が届きにくくなることはわからないでもないけれども、すぐ手が届くかなというのは心配です。

また、合併する町村の中には多くの借金を持ってくるのではないかという話があったということですが、財政にあまり携わっておられない人はわからないでしょうけども、どの市町村も公共施設整備には地方債で対応していると思います。川上村の場合はほとんど過

疎対策事業債があるので財政力指数により、返済金の7割は法により国から交付されるので、差し引き3割の支払いとなるわけです。歳出だけ見てこの村は借金が多いと評価されるのは非常に残念であり、大変辛いなという思いがあります。

それともう一つは合併したそれぞれの町村の特徴等というものを把握し、それをしっかりと活かしていくことが、中津川市全体が良くなるということだと思います。

例えば、ピラミッドが長い間崩れないでいるのは、中心はもとより周りがしっかりしているからであり、行政も地域全体にしっかりと目配りをして、それぞれの地域の良いところを活かしていくことこそ、初めて市が良くなると思いますので、そのような気持ちで取り組んでいただきたいと思っています。

深谷:福岡町は合併する時に町名をどうするという話になった時に、私は福岡町という名を残すべきだというのを主張しましたが、地域の皆さんを含めて財産区の皆さんは福岡町というよりも現在も残っている財産区名の方に愛着が強かった。だから合併する時も福岡町という名を消すということには何の問題もないですけども田瀬、下野、福岡、高山という旧の財産区、大字を消すことには大きな問題がありました。福岡町が無くなることに対して住民の皆さんから何か意見があるというのは、当時議会の中にいてもほとんど聞かなかったです。

福岡町という一つの自治体組織が無くなるということに対する、普通で言われる寂しさだとか抵抗感というのは少なかったのかなと思います。ですから今になって各大字名を残したために旧福岡町としてのまとまりがますます希薄になってきてしまったな、残しとくべきだったなという話があります。ちょっと福岡町は独特なのかな。

司会：迎え入れる側だった市はいかがでしょうか。

三浦:今回の平成の大合併は、国がいろいろの意味で飴と鞭ということでいろんな手を使って合併を推進してきました。

迎える立場の中津川市としても、市の財政状況がそんなに潤沢ではないというような思いもありましたので、果たして町村の皆さんが来られても大丈夫かなというような思いもありました。

しかし市長が一貫して言われたのは、協議にあたって町村の皆さんに不満が出ないようにということで、「合併協議を進める上で大切なことはお互いの持つ個性あるいは文化を大切にしながら地域づくりを進めること。そして合併の方式は中津川市への編入であってもお互い対等の気持ちでなければならない」ということを常に言われていました。

そのことから中津川市は合併の形態にこだわることなく、東濃東部の中核都市としての役割と使命を一緒に構築していくための力強いパートナーであるという考え方で、山口村と恵那郡北部の各町村との合併に向き合ってきました。合併後においても、新しい中津川市がさらに発展していくような形で力を合わせていきたいとの思いから迎えさせていただいたものと言えます。

司会:合併した時も、そして今も、将来の中津川市に皆さん期待をされていることを伺います。

田口:合併前の説明会の折に、少子高齢化のため地域の人口減少が急速に進む話をしましたが、予想以上の現実に驚いています。

加子母全体で、昨年2020年度の出生者は9名でした。私の住む二渡地区は65世帯ですが、2013年以来8年間子どもは一人も生まれていませんが、嬉しいことに最近3名の若者が移住しトマト栽培を始めてくれました。人口減少は続くと思いますが、中津川市に住みたい・住んでよかった、みんなが幸せを感じ楽しく暮らせる、そんな中津川市を創造してほしいと願っています。

先人の努力のおかげで、念願のリニア中央新幹線が開通し、坂本に駅ができます。中津川市に与えられた絶好のチャンスを最大限活かしてください。中津川市が発展するには、編入合併した全ての地域に細大の配慮

をしていただくことがとても大切です。くれぐれもよろしくお願いいたします。中津川市を活性化できるのは、市トップのリーダーシップとスタッフ（市職員）のやる気と力量です。市職員の皆さんはそれだけの力を持った集団です。責務もあります。公務員としての使命を全うされ、ご活躍されることを期待するとともに楽しみにしています。

中西：蛭川村というところはどちらかといえば行政主導で地域を引っ張ってきた経緯があります。それで財源的にも村有林からの収益がかなりあり、そのため村の事業は行政が企画し実施してきたのが蛭川村の仕組みでした。そのために個人が行政に寄りかかりすぎて、自分たちで何か考えてやろうかという気持ちというのが薄れていたと思います。

中西 康浩 氏

合併してから、市が発展するために蛭川地域は何をやったらいいだろうかと相談するときも、「何をやればいいやろう」というような、全く人頼みという人も多かった。これがひとつのネックになったかなと思います。

これからは中津川市内どの地域でも一緒だと思いますが、中津川市の発展、それからそれぞれの地域が発展するために何を進めていくかということを、この時期にもう一度見つめ直すことが必要かなとそんな気がしています。

加藤：合併して16年経ちましたが、市全体では一体感が生まれつつあるかな、と感じておりますが、同時に課題も多くあるように思います。それぞれの地域課題を解消するためにも、今一度、合併の賛否判断に作成した新市建設計画書に基づき各地域の評価と検証をすることが大切なことだと思っております。また、衰退していく各地域の地域力を高めるためにも人材育成にも力を注いでほしいし、リニア岐阜県駅の波及効果を最大限に生かし、住んで良かった、住みたくなる街を実現し、将来にわたり文化が香る、農林業をはじめ商工業が栄える中津川市に発展していくことを望みます。

司会：本日は合併の当時を振り返って多くの出来事を経験された皆さんに貴重なお話を伺うことができ大変有意義な座談会とすることができました。ありがとうございました。

注）座談会は新型コロナウイルス感染症予防対策のため全員マスク着用で行いました。

注）座談会での「対等合併」という表現について
合併の方式は「新設合併」または「編入合併」のいずれかが正式な呼称ですが、それとは別に「対等合併」「吸収合併」と呼ぶこともあります。合併協議を進める中で当時の市長が、「合併の方式は中津川市への編入合併であるが、お互い対等の気持ちでなければならない」と説明していたこともあり、「対等合併」という表現が随所で使われています。